

これは、昨年12月21日岩田規夫氏(高碕翁の実姉のお孫さん)の柱本公民館で行われた講演の要約であります。

### 1. 胸像の話

東洋製罐の高槻工場が滋賀県に移転になることになり、玄関にあった胸像を市役所において頂けないかと高槻の総務課長に相談しまして、市議員と一緒に副市長・関係先をお願いをしに行った。しかし、高碕さんは名誉市民ではあるが、名誉市民は5人おられ高碕さんだけを特別視するわけにはいかない。さらに古い人であるのでどのような業績があったかわからないとの回答であった。あまりややこしい話を持って来ては…の話であった。そこで再度業績を報告する対応を行った。その時まとめたのは、先生は終戦を満州で迎えられる。邦人の帰国に奔走された話、それに加えて佐久間ダム・電源開発・荘川桜など6項目にまとめて市役所に提出した。そうしたところ2、3日すると市の方から呼び出しの電話があり、いよいよダメかと思ってお伺いしたが、「この話は面白い話である。置いてくれというなら置いてやったらどうか」の奥本市長の一言で形勢が逆転してしまった。

工場としては本社の最終決済をとっておらなかったのが三木会長・清水常務には急いで許可を得た次第である。急いだのは、奥本市長は自分の任期中においてくれ、残り1年と1ヶ月ほどしかなかった。三木会長は「古いものを差し上げるのではなくて、メーカーに持って帰って化粧直しをしてお届けするように」と埼玉まで送り手直して設置できた次第である。

### 2. 昭和30年の初めての選挙

選挙事務長の努力があった。高碕は4回選挙に出たが選挙事務長は4回とも高槻の磯村弥右衛門市長であった。選挙区は今と違い、淀川を挟み東は、枚方市、寝屋川市、交野市、守口市、門真市、四條畷市、大東市、西側は高槻市・島本町・摂津市・茨木市、池田市、箕面市などで広い選挙区で大阪三区であった。各市町村の選挙会場に演説会場が設けられて、全員がそこに集まって、順番に演説を行うスタイルであった。選挙が始まる前日ポスター貼りとして控えていたが、呼ばれて2階に上がっていくと高碕先生・磯村さん・小西さん・秘書官・高碕さんの奥さん・長女の方がいらっしゃった。磯村さんから「岩田君明日から高碕先生の車に乗って演説会場周りをしてくれと」といわれ青天の霹靂と言うべきか、頭が真っ白になるかというか、一体どうしたら良いだろうかと思ったが「わかりました」と返事をした。選挙カーで一緒になることで先生の一面を知ることになった。

はじめに豊中に行くとその道中で「あれがなんだ、これがなんだ」とやつぎばやに質問が飛び込んでくる。初めに聞かれたのは阿武山の京大の地震研究所、「あれはなんだ?」と。阿武山に友達が居てたので知っていたので「京大の地震研究所です」というと、「そうか」と言っていたただけで、後にも先にも「そうか」といわれたのはそれだけです。次は茨木の弁天さんを見て「あれは何か?」「弁天さんです」というと「何をするところや、いつ作ったんや」といわれ「しりません」というと「バカ野郎、なにもしらんやつが、ばかたれ」の三つが飛び込んでくる。一週間の演説場巡りでその言葉を何度聞いたことか、本当にまいった次第ですけど、人間は図太いもので、2、3日たつてくると、またかとも感じなくなったことを記憶しています。

事務所に帰ってくると一緒に車に乗っている長女の平原さんが「あうゆう性格やから堪忍やで、いつもどなってるんや、明日も来てや」と優しく言ってもらったことが慰めになっておった。

開票の結果トップ当選で選挙事務所はごった返していたが、群衆をかき分けて先生のところへ行き「おめでとうございます」と申し上げたところ、「うん」の一言で今まで見たことのない笑顔と、優しい目で見えていただいたことで、いままで「ばか野郎、ばかたれ、なにもしらんやつが」と言われていたことが吹き飛んでしまった。

### 3. 魚とりのおはなし

淀川の右岸には川の水たまりがあった。昭和34、5年の時先生と魚とりをしようということになり、村の大勢が出て魚を一網打尽にすべく網を張ったが、網が引っかかってしまった。その時先生は私に向かい「お前は一番若い、入れ」といわれ5月か6月でまだ肌寒かったが泥だらけになって網を剥がし上がってくると、ドロドロの私を見て「風呂に入って来い」と言われたのも私との出来事でした。

### 4. 高碕煮という缶詰

昭和33年から35年の選挙の時に「高碕煮」という缶詰が突然出てきた記憶がある。缶詰屋が勝手に作って市販されたわけではない。販売すると選挙違反になるのは明らかなので会社が全数買い取り従業員に配った。そのラベルに書いてある文句は「ソ連と縁が深い昆布と、アメリカと縁の浅くないスタイル、それに日本独自のかつおを加えたものを高碕煮という」が書かれており、美味しく頂いた記憶がある。

### 5. 派閥の問題

昭和31、2年のことである。小さく新聞に出ていたのは、「清廉潔白と思われていた高碕が河野一郎に属しているのは心外である」と書かれていた。ところが河野一郎さんは、日魯漁業のご出身で、缶を買っていただけ大きなお得意先であった。ゆえに河野さんの派閥に属して、主義主張が違っても商売上ベターだと考えられ、そうされていたのであろう。商売根性というか……。